

■■最強の投資手法「スーパーボリンジャー」によるシンプルトレード■■

ドルストレート通貨ペア(ドル円、ユーロドル、豪ドルドル、ポンドドル)、クロス円通貨ペア(ユーロ円、豪ドル円、ポンド円)に関して、週足、日足、4時間足、1時間足分析を掲載します。分析は、全て、9月18日のNY市場終値(先週末終値)時点での判断です。

<<<主要7通貨相場週足、日足、4時間足、1時間足分析>>>

「週足」はポジショントレードの大局観把握、

「日足」はスイングトレードの大局観把握、

「4時間足」はゆったりデイトレードの大局観把握、

「1時間足」はデイトレードの大局観把握に特に有効です。

尚、特に、1時間足は、刻々と変化するため、その都度の判断が必要です。

また、売買判断は、トレードスタイル別の大局観より下位の時間軸チャートにて判断することをお勧めします。

例えば、ポジショントレードであれば、主に日足での売買判断、

スイングトレードであれば、主に4時間足での売買判断、

ゆったりデイトレードであれば、主に1時間足での売買判断、

デイトレードであれば、主に5分足での売買判断となります。

■■ドル円

◆週足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウントレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウントレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $+2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
- 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、

- 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
 - 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクすること、
- 等々。特に、(2)の条件がクリアーされることが望ましい。

◆日足

調整反騰局面。

本格下落トレンド局面の後、終値が -1σ ラインを上回って以降、調整反騰局面入りしている。

トレード戦略としては、短期的に一旦は買いを優先させたい局面。

そして、センターラインは最初の戻りの目途となるが、終値がセンターラインを上回ると、 $+2\sigma$ ラインを目指す本格的な調整反騰局面に入る。

一方、今後、終値がセンターラインをブレイクしないと、緩やかな下落トレンド局面に入る可能性が高まる。

尚、遅行スパンが陽転しないかぎり、センターラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯は、一旦は戻り売りゾーンと読む。

また、終値が -2σ ラインを下回るまでは、 -1σ ラインから -2σ ラインのゾーンは一旦は押し目買いチャンスと判断する。

◆4時間足

緩やかな上昇トレンド局面。

終値とセンターラインとの位置関係を注視したい場面。

すなわち、終値がセンターラインを上回るかぎり緩やかな上昇トレンド局面継続となる
一方、終値が同ラインを下回ると -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、緩やかな上昇トレンドの特徴がセンターラインと $+2\sigma$ ラインの間を往来しながらゆっくりと上昇するところから、センターラインに接近する場面は、一旦は押し目買い戦略が有効となり、 $+2\sigma$ ライン近辺では戻り売り戦略が有効となりやすい。
一方、終値がセンターラインを下回ると、本格的な調整反落局面入りする可能性が高まるため、買いポジションは一旦撤退となる。

◆1時間足

本格的な調整反落局面。

調整反落局面の中にあって、終値がセンターラインを下回って以降、 -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面入りしていると判断。

トレード戦略としては、目先、売り戦略が有効な場面ではあるが、今後、遅行スパンが陰転しないかぎり、 -1σ ラインから -2σ ラインのゾーンは、一旦は押し目買いチャンスとも読む。

尚、今後、遅行スパンが陰転し、終値が -2σ ラインを下回り、バンド幅が拡大傾向に転じる場合は、本格下落トレンド局面入りする可能性が高まる点には念のため注意しておきたい。

■ユーロドル

◆週足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウントレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウントレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
 - 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
 - 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクspansion」と言う)、
 - 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクすること、
- 等々。特に、(2)の条件がクリアーされることが望ましい。

◆日足

本格下落トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陰転している、(2)初動で終値が -2σ を下回ったこと、

(3) バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と -1σ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が -1σ ラインを下回るかぎり本格下落トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを上回ると調整反騰局面入りする。

トレード戦略としては、終値が -1σ ラインを下回り続けるかぎり、売りポジションキープする一方で、終値が同ラインを上回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反騰局面入りを確認後は、短期的に買い戦略も有効な場面となる。

◆4 時間足

緩やかな下落トレンド局面。

終値とセンターラインとの位置関係を注視したい場面。

すなわち、終値がセンターラインを下回るかぎり緩やかな下落トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを上回ると $+2\sigma$ ラインを目指す本格的な調整反騰局面入りする。

トレード戦略としては、緩やかな下落トレンドの特徴がセンターラインと -2σ ラインの間を往来しながらゆっくりと下落するところから、センターラインに接近する場面は、一旦は戻り売り戦略が有効となり、 -2σ ライン近辺では押し目買い戦略が有効となりやすい。一方、終値がセンターラインを上回ると、本格的な調整反騰局面入りする可能性が高まるため、売りポジションは一旦撤退となる。

◆1 時間足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $+2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
- 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
- 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクスパンション」と言う)、

4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクすること、等々。特に、(2)の条件がクリアされることが望ましい。

■ ■ 豪ドル/ドル

◆ 週足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
- 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
- 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
- 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクすること、等々。特に、(2)の条件がクリアされることが望ましい。

◆ 日足

調整反落局面の最終ターゲットである -2σ ラインに到達。

今後、本格下落トレンド局面入りするか、レンジ局面入りするかの瀬戸際に位置。

尚、本格下落トレンド局面発生の際の「相場の下放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から下放れる(陰転する)、
- 2) 終値が -2σ ラインの下方にて引ける、
- 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
- 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 -2σ ラインをブレイクする、等々。

上記の条件が整えば、売りエントリーが推奨される。

一方、終値が -1σ ラインを上回るとレンジ局面入りする可能性が高まるため、目先は買い戦略が推奨される。

◆4 時間足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
 - 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
 - 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
 - 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクすること、
- 等々。特に、(2)の条件がクリアされることが望ましい。

◆1 時間足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
 - 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
 - 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
 - 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクすること、
- 等々。特に、(2)の条件がクリアされることが望ましい。

■■ポンドドル

◆週足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウントレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウントレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
 - 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
 - 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
 - 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクすること、
- 等々。特に、(2)の条件がクリアーされることが望ましい。

◆日足

本格下落トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陰転している、(2)初動で終値が -2σ を下回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と -1σ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が -1σ ラインを下回るかぎり本格下落トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを上回ると調整反騰局面入りする。

トレード戦略としては、終値が -1σ ラインを下回り続けるかぎり、売りポジションキープする一方で、終値が同ラインを上回ると、一旦手仕舞いを推奨。そして、調整反騰局面入りを確認後は、短期的に買い戦略も有効な場面となる。

◆4 時間足

緩やかな下落トレンド局面。

終値とセンターラインとの位置関係を注視したい場面。

すなわち、終値がセンターラインを下回るかぎり緩やかな下落トレンド局面継続となる

一方、終値が同ラインを上回ると+2 σ ラインを目指す本格的な調整反騰局面入りする。

トレード戦略としては、緩やかな下落トレンドの特徴がセンターラインと-2 σ ラインの間を往来しながらゆっくりと下落するところから、センターラインに接近する場面は、一旦は戻り売り戦略が有効となり、-2 σ ライン近辺では押し目買い戦略が有効となりやすい。一方、終値がセンターラインを上回ると、本格的な調整反騰局面入りする可能性が高まるため、売りポジションは一旦撤退となる。

◆1 時間足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)初動で終値が+2 σ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と+1 σ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が+1 σ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が+1 σ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

■■ユーロ円

◆週足

本格下落トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陰転している、(2)初動で終値が-2 σ を下回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と-1 σ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が-1 σ ラインを下回るかぎり本格下落トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを上回ると調整反騰局面入りする。

トレード戦略としては、終値が-1 σ ラインを下回り続けるかぎり、売りポジションキープする一方で、終値が同ラインを上回ると、一旦手仕舞いを推奨。そして、調整反騰局面入りを確認後は、短期的に買い戦略も有効な場面となる。

◆日足

調整反落局面。

本格上昇トレンド局面の後、終値が $+1\sigma$ ラインを下回ったことで、調整反落局面入りしている。

トレード戦略としては、短期的に一旦は売りを優先させたい局面。

そして、センターラインは最初の押しの目途となるが、終値がセンターラインを下回ると、 -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面に入る。

一方、今後、終値がセンターラインをブレイクしないと、緩やかな上昇トレンド局面に入る可能性が高まる。

尚、遅行スパンが陰転しないかぎり、センターラインから -2σ ラインにかけての価格帯は、一旦は押し目買いゾーンと読む。

また、終値が $+2\sigma$ ラインを上回るまでは、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインのゾーンは一旦は戻り売りチャンスと判断する。

◆4 時間足

緩やかな上昇トレンド局面。

終値とセンターラインとの位置関係を注視したい場面。

すなわち、終値がセンターラインを上回るかぎり緩やかな上昇トレンド局面継続となる
一方、終値が同ラインを下回ると -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、緩やかな上昇トレンドの特徴がセンターラインと $+2\sigma$ ラインの間を往来しながらゆっくりと上昇するところから、センターラインに接近する場面は、一旦は押し目買い戦略が有効となり、 $+2\sigma$ ライン近辺では戻り売り戦略が有効となりやすい。
一方、終値がセンターラインを下回ると、本格的な調整反落局面入りする可能性が高まるため、買いポジションは一旦撤退となる。

◆1 時間足

本格的な調整反落局面。

調整反落局面の中であって、終値がセンターラインを下回って以降、 -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面入りしていると判断。

トレード戦略としては、目先、売り戦略が有効な場面ではあるが、今後、遅行スパンが陰転しないかぎり、 -1σ ラインから -2σ ラインのゾーンは、一旦は押し目買いチャンスとも読む。

尚、今後、遅行スパンが陰転し、終値が -2σ ラインを下回り、バンド幅が拡大傾向に転じる場合は、本格下落トレンド局面入りする可能性が高まる点には念のため注意しておきたい。

■■豪ドル円

◆週足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
 - 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
 - 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
 - 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクすること、
- 等々。特に、(2)の条件がクリアーされることが望ましい。

◆日足

調整反騰局面。

本格下落トレンド局面の後、終値が -1σ ラインを上回って以降、調整反騰局面入りしている。

トレード戦略としては、短期的に一旦は買いを優先させたい局面。

そして、センターラインは最初の戻りの目途となるが、終値がセンターラインを

上回ると、+2 σ ラインを目指す本格的な調整反騰局面に入る。

一方、今後、終値がセンターラインをブレイクしないと、緩やかな下落トレンド局面に入る可能性が高まる。

尚、遅行スパンが陽転しないかぎり、センターラインから+2 σ ラインにかけての価格帯は、一旦は売りゾーンと読む。

また、終値が-2 σ ラインを下回るまでは、-1 σ ラインから-2 σ ラインのゾーンは一旦は押し目買いチャンスと判断する。

◆4 時間足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)初動で終値が+2 σ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と+1 σ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が+1 σ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が+1 σ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

◆1 時間足

本格的な調整反落局面。

調整反落局面の中にあって、終値がセンターラインを下回って以降、-2 σ ラインを目指す本格的な調整反落局面入りしていると判断。

トレード戦略としては、目先、売り戦略が有効な場面ではあるが、今後、遅行スパンが陰転しないかぎり、-1 σ ラインから-2 σ ラインのゾーンは、一旦は押し目買いチャンスとも読む。

尚、今後、遅行スパンが陰転し、終値が-2 σ ラインを下回り、バンド幅が拡大傾向に転じる場合は、本格下落トレンド局面入りする可能性が高まる点には念のため注意しておきたい。

■■ポンド円

◆週足

本格下落トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陰転している、(2)初動で終値が -2σ を下回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と -1σ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が -1σ ラインを下回るかぎり本格下落トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを上回ると調整反騰局面入りする。

トレード戦略としては、終値が -1σ ラインを下回り続けるかぎり、売りポジションキープする一方で、終値が同ラインを上回ると、一旦手仕舞いを推奨。
そして、調整反騰局面入りを確認後は、短期的に買い戦略も有効な場面となる。

◆日足

調整反騰局面。

本格下落トレンド局面の後、終値が -1σ ラインを上回ったことで、調整反騰局面入りしている。

トレード戦略としては、短期的に一旦は買いを優先させたい局面。

そして、センターラインは最初の戻りの目途となるが、終値がセンターラインを上回ると、 $+2\sigma$ ラインを目指す本格的な調整反騰局面に入る。

一方、今後、終値がセンターラインをブレイクしないと、緩やかな下落トレンド局面に入る可能性が高まる。

尚、遅行スパンが陽転しないかぎり、センターラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯は、一旦は戻り売りゾーンと読む。

また、終値が -2σ ラインを下回るまでは、 -1σ ラインから -2σ ラインのゾーンは一旦は押し目買いチャンスと判断する。

◆4時間足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)初動で終値が $+2\sigma$ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と $+1\sigma$ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が $+1\sigma$ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が $+1\sigma$ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

◆1 時間足

本格的な調整反落局面。

調整反落局面の中にあって、終値がセンターラインを下回って以降、 -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面入りしていると判断。

トレード戦略としては、目先、売り戦略が有効な場面ではあるが、今後、遅行スパンが陰転しないかぎり、 -1σ ラインから -2σ ラインのゾーンは、一旦は押し目買いチャンスとも読む。

尚、今後、遅行スパンが陰転し、終値が -2σ ラインを下回り、バンド幅が拡大傾向に転じる場合は、本格下落トレンド局面入りする可能性が高まる点には念のため注意しておきたい。

以上です。